

では、その勝てない理由は何か。それは、非対称性にある。むろん軍事関係者は、しばしば米軍のハイテクVS弱者のローテクという関係、「持てるもの」と「持たざるもの」との非対称性についてすでに言及している。しかし、本書で見出された非対称性は、それとは異なる。人道を看板に掲げるがゆえに足枷をはめた米軍と、そうでないタリバンとの非対称性である。

タリバンは（彼らの解釈による）イスラムの大義を前面に押し出し、犠牲を厭わない。対して、米軍は人道という普遍的概念を前面に押し出すがゆえに、無人機による攻撃への批判や民間人の被害に対し、極度に敏感となる。その結果、様々な犠牲を抑制するために巨額の支出を余儀なくされる。

加えて、戦闘員のリクルートでの非対称性も存在する。すでに戦場であるアフガニスタンにおいては、生きるために戦闘員となる選択は、ある程度合理的といえよう。しかし、平和なアメリカにおいて、わざわざ好んで戦場に赴くものは少ない。その結果、かつての戦争と異なり、わずか1%のアメリカ人に負担が偏ってしまう。しかも、TBI（外傷性脳損傷）と呼ばれる新たな疾患が表れ、戦場から生還した人々を苦しめることになる。

さらには、米軍が人道を掲げて努力を積み重ねるにもかかわらず、その行為が非人道的とみなされるという矛盾の只中にアメリカは置かれてしまっている。

もはや戦争が、単なる物理的な軍事力の衝突ではなく、倫理や世論といった「空中戦」によって決するものへと変容してしまったかのようである。そう嘆息せざるをえない現代の戦争の性質を、本書は描き出している。

大治朋子著

『勝てないアメリカー「対テロ戦争」の日常』

（岩波新書、2012年）

大庭弘継

2001年から10年以上にわたりアメリカは、アフガニスタンで対テロ戦争を行ってきた。圧倒的な超大国アメリカではあるが、戦争は泥沼化している。「圧倒的な優位にあるはずの米軍が「弱者」に翻弄されている」のだ（表紙見開きより）。なぜアメリカは勝てないのか。本書は、各種の調査結果や学術文献にも目配りしながら、著者自身の従軍取材を踏まえて、勝てない理由を探究している。